

令和6年度 第6回白山市ミライ会議 【概要】

日 時 令和6年7月12日(金)14:00~15:00

場 所 市民交流センター 3階企画展示室

テーマ 【子育て】 子どもの居場所づくり

出席者 6人〔みんなの食堂運営団体・ボランティア〕



◆各町に出向いて開催 参加する人に役割や自主性をもたせ、それぞれの記憶に残る活動を (出席者①)

昨年度から、地区の社会福祉協議会事業として、「みんなの食堂」を始めました。地域性を考え、対象の町に出向く形で開催しており、公民館で作った食事を開催場所に持って行っています。その町の事情に合わせながら、子どもたちを集めるのは町の子ども会が担当し、町の福祉協力員や社協理事、区長を巻き込んで活動しています。できるだけ町の人々の自主性に委ね、食事作りは私たちスタッフが担い、子どもたちを楽しませる企画は町の人に協力してもらっているので、開催日ごとにそれぞれの町のカラーが出ています。今年度は、0歳から小学校6年生までの子どもが10人程、中学生や高校生も保護者の立場で参加し、さらに65歳以上の方も対象にして参加者を広げました。また、作るスタッフの負担がないよう、メニューは同じものにして、昨年度はカレー、今年は高齢の方の食べやすさも考慮し、ちらし寿司にしました。そして参加者にも食器を洗ったり配膳したり役割を担ってもらって、子どもは楽しむ、大人は楽しませる、そういった形でその町その町で開催できたらいいかなと思っています。

(市長)

そういった形でやってみて、良かったと思うことはありますか。

(出席者①)

頑張るエネルギーを分散できます。私たちスタッフが頑張ると、催す側と参加する側に分かれてしまいます。そうではなく、みんなでやりましょうという形がいい。役割や自主性を持たせ、自分たちで作り上げるという意識を持つことが大切だと思います。「あそこが美味しかった」「あそこで手伝った」といった、子どもたちの記憶に残すことを大事にしたい。市ではみんなの食堂を通じて子どもの居場所を提供していて、どう展開していくかは時間がかかると思いますが、関わった人が工夫を凝らしていける形に変わっていけばいいと思います。

(市長)

食べて「おいしい」だけではなく、体験が大切ですね。

(出席者①)

メニューは誰でもできる簡単なものになっています。ちらし寿司づくりをお母さんたちに手伝ってもらった時には、こんなに簡単に作れるのかと喜んで、家でも作ってみるという声を聞きました。子どもたちも参加しているので、「みんなの食堂で食べたちらし寿司」が、各家庭にも広がっていくと思います。時間もコンパクトにして、メニューもその都度変えたりせず、負担にならないように心がけています。

(市長)

確かに子どもたちだけでなく、親世代とも交流できていいですね。地域のつながりも広がることで、これから先も続いていくと思います。

(出席者①)

以前に、高齢者対象のふれあいサロンを開いたときには、各町を3回ほど回りました。前もしたよという話が広がって、続けることが大事だと感じました。みんなの食堂は、まだ始まったばかりで過去の貯金はありませんが、参加者がただ参加するだけでなく、お手伝いを通じて成長することができるため、続けることが大切だと思います。

(広報広聴課長)

いろいろな運営方法があるかと思いますが、別のところはいかがですか。

◆献立を考え料理を作るボランティアスタッフとして、喜びと感謝の気持ち

(出席者②)

運営には関わっていませんが、社会福祉協議会のみんなの食堂ボランティアとして、調理補助などをしていて、子どもたちにいかに美味しい食事を提供するか工夫しています。少しずつ親子での参加者が増えている感じがして、恐らく口コミで広がっていると思いますが、平日の夜、一食でも私たちが食事を作って、お母さんたちの手助けができていることが嬉しい。スタッフとして献立を考え作るだけですが、いつも感謝しています。地区全体のほんの一部の人が口コミで来るだけですが、最近では30人ほどが来ています。今回の話を伺って、地区へ出張する形もいいかなと思いました。

◆団体ごとに異なる活動 地域との連携方法を模索

(出席者③)

ほかの食堂の活動について話を聞くのは初めてですが、各団体で全く違うのですね。私たちは、もともと高齢者のふれあいサロンを毎月開いていて、年3回春夏冬の長期休みのタイミングで子どもたちを呼んで、自分たちで料理を作り、自分たちで食べるということをしています。

おにぎらずやサンドイッチなどを、高齢者も子どもも一緒に作って、勉強会も一緒にしています。子どもたちの生活力を育みたいとの思いで、このような形で行っています。

補助金については、高齢者ふれあいサロンと併せて使えて助かっていますが、細かい計算や用途によって使えないこともあり、少し困っています。先ほどのお話では社協と連携しているようですが、私たちは単独で行っています。コミュニティセンターや地区の社会福祉協議会と、どのように連携したらいいかも分かりません。

(出席者①)

金銭的には、みんなの食堂の補助金だけでは運営できません。地区社協からも、年間いくらかを出してもらっています。そうでなければ、やっていけません。年度最後には、残金と格闘しています。

(市長)

今、各コミュニティセンターには、交付金を出しています。そういったものも利用できるのではないのでしょうか。地区社協や地域コミュニティと、今後連携していけばいいと思います。

(出席者①)

私たちは、地区社協の事業の一環として行っています。コミュニティセンターとの関係まで広がると、どういった形で連携していくか課題が出てくると思います。食べる料金は、子ども50円、大人100円で、参加者もスタッフも同じです。お金をいただいてもそれほどの金額にはなりませんが、無料で何かをもらうのではなく、必ずそこにお金が発生することが大事だと思います。

◆顔見知りの関係構築 コミュニケーションを重ね民生委員の活動にも結びつけたい

(出席者③)

町の中を歩くと、高齢者や子どももいるものの、見知らぬ関係では声もかけられません。顔見知りの関係を作り、困っていたらお互いに声を掛け合う。そういったつながりを大事にしたいと思っています。なるべく触れ合う形でのコミュニケーションを心掛けていきます。片親の世帯も増えていて、困ることも多いと思うので、困りごとを聞くことを通じて、そうした人たちと触れ合いながら民生委員の活動に結びつけていきたいと思っています。

(出席者①)

昨年、みんなの食堂を開いた時に、民生委員が気にかけている家庭が参加できるようにしたいという話が出ました。民生委員からその家庭に声をかけてもらっても、実際に参加することは難しかったのですが、食事を取りに来て持ち帰る人もいて、そうしたつながり方もできます。

当初の子ども食堂は、孤食や経済的なマイナスイメージから参加しづらい面もありましたが、みんながつながる「みんなの食堂」として認知されることで参加しやすくなり、民生委員もいることで、気にかかることもキャッチしてもらえるので、そういった意味でやりやすいと思います。

◆子どもだけでなく、地域も利用するみんなの食堂 より一層の浸透に課題

(出席者④)

私は、食生活改善推進員をしていて、みんなの食堂や食に関する活動にずっと携わっています。ある時、食堂に来る子どもが7人にも関わらず、50人分の食事を作ってくださいと言われ、驚いたことがあります。しかし、実際は、困窮している子どもだけでなく、地域の人も利用していて、みんなの食堂として浸透させるため続けていくことが非常に大事だと思いました。料理が好きで、美味しいと言ってくれるのが嬉しく、この活動には満足しています。

親がフルタイムで働いていると、親が帰るまで子どもは1人です。交通事故や熱中症といった危険があるため、安全に過ごせる子どもたちの居場所を考えなくてはいけないと思います。子育て支援センターで、働く母親の料理教室があった際に、参加していたお母さんにみんなの食堂のことを聞いても、知っている人はいませんでした。色々な場面でみんなの食堂の話をしていますが、情報を求めている人には届いているものの、知らない人は知らない。情報がちゃんと届いているか疑問です。みんなの食堂が周知され、子どもたちが楽しく食事ができる場になればいいと思います。

(出席者②)

コミュニティセンターでみんなの食堂を開いていて、子ども食堂の基金だけでなく個人の資金も入れてやっています。他と仕組みが違い、食事と子どもたちの遊びや学習を行っています。いつも50人くらいが来ていて、食事は80食ほど作っています。地元小学校には800人くらいいて、参加できる子どもはほんのわずかです。20ほどの町会があり、町会長、民生委員と相談して、地区ごとに呼びかけ集会所単位が開くことができれば、子どもたちも参加してくれると思います。そのためには資金が必要で、町会単位であれば協力を仰げるのではないかと期待しています。

(市長)

情報が届いているかどうかについては、色々な場面でそういった声を聴きます。市役所がSNSなどを通じて情報を発信しているものの、利用しない人には情報が届かない。気をつけていかなければいけないと思います。

(出席者①)

みんなの食堂を開くにあたって、子ども会に人集めをお願いすると、役員はLINEでつながっていて、顔を合わせて打ち合わせをすることがなく、チラシも全部LINEで流すため、紙のチラシはいらないと聞き、驚きました。そのため、子ども会に入っていない人には情報を知る機会がありません。兄弟や隣の家の子にも声をかけてと、アナログな情報伝達の仕方をお願いすると、逆に新鮮に感じるようでした。町などの小さな単位で開催したほうが、そういった形で情報は広げやすい。高齢者には、町内会の部長を通じてチラシを配るよう願っています。若いお母さんのやり方で、その時代にマッチした形でやってもらえればいいと思います。

(市長)

学校への欠席連絡が、電話ではなく、スマートフォンからLINEなどのアプリで行われていきます。防災訓練の際には、近所付き合いがないと、近くに支援が必要な人がいるか分からないという話が出ていました。先ほど話にもあったように、1万人以上の人口がいる地区のコミュニティセンターで開いても数人しか来ないのであれば、町会単位で開催できたら子ども会とも連携できるのではないかと思います。

(出席者②)

お年寄りや子どもにとっても、歩いて行ける距離で開催できることが一番いいと思います。

(広報広聴課)

お母さんの口コミや子ども同士が誘い合って参加者が増えると、手伝いも必要になります。こういった経緯で、ボランティアを始めたのですか。

◆SNSやLINEを活用した周知と楽しい体験活動の提供を

(出席者⑤)

2年前からみんなの食堂を手伝い始め、子どもの遊び相手をしています。最初は、月1回の食事の提供で何が変わるのかと疑問を持っていましたが、実際に子どもたちと関わる中で、引きこもりの子が学校に行けるようになったという声を聞くと嬉しく感じます。子どもたちが月に一度の活動を楽しみにしており、その活動を通じて学校に行けるようになったという話を聞くと、これは大変良い活動だと実感しています。

先ほどの話でもありましたが、参加者を増やすためにはSNSやLINEなどの活用が必要だと思います。それに子どもたちは体験が好きです。ひとり親の子が魚釣りに行ったことがないと言うので誘ってみると、連れて行ってとせがまれました。そういった活動があってもいいかもしれません。白山市ではジオパークの体験をしているので、体験学習などにみんなの食堂も参加すれば、子どもたちに明るい体験を提供できるのではないかと思います。

(市長)

学校でもジオパークに関連した子どもの体験活動を取り入れています。こうした活動は、学校の枠を超えて、さまざまな場所で行っていきたいと思います。

◆母子・父子家庭を対象に活動 働く保護者のため学校を休んだ子も利用できる場所が必要

(出席者⑥)

青少年宿泊研修センターの指定管理者として6年目を迎えます。当初はコロナの影響で、地元との地域懇談会も開けず、宿泊活動もままならない状況でした。そこで市の担当者に相談の上、みんなの食堂を始めました。

主にシングルの母子・父子家庭を対象にし、SNSを通じて情報発信を行い、申し込みがいっぱいになるとSNSを閉じています。食事は子どもと保護者を合わせて50食、多い時は80食出したこともあります。同時に「おもちゃのかえっこバザール」も開いていて、バザールを目当

てに来た人が食堂に寄っていたり、食堂に来た子がバザールで遊んでいたりしています。地元だけに限らず、金沢大学や金城大学の学生、高校生、参加者だった若い保護者がボランティアで参加してくれています。

最初はどうしたらいいかわかりませんでしたが、金沢市での活動を参考にさせてもらっています。今年2月に金城大学看護学部が実習の一環として2日間の宿泊型子ども食堂に参加し、子どもたちと交流しました。子どもたちは日頃大学生と接する機会が少ないため、本当に楽しそうで、もっとやってほしいという声があがっています。

シングルのお母さんたちからは、学校を休むと学童保育が利用できず、仕事を休まざるを得ないという声を聴きます。放課後等デイサービスの場合は、学校を休んでも普通に利用できます。富山県では共生型デイサービスを開いていて、障害者や高齢者、子どもも利用できます。そこまではいなくても、学童保育でもあり、学校を休んだ子どもも行ける場所があればいいと思います。シングルのお母さんたちは仕事を掛け持ちしながら、子どもにはみすぼらしいものを着せたくない、スマートフォンを持たせたいと考えていて、そのしわ寄せがいくのが食費です。

(出席者⑥)

シングル家庭であれば扶養手当があるけれど、経済的に困難な人に食糧を提供する「フードパントリー」にパンの耳とかを取りに来たりします。生活費を切り詰めるとしたら、食費になるのかなと思います。

(市長)

子どもたちにはすくすく育て欲しいと、様々な素晴らしい意見をいただきました。今後も、地域においてみんなの食堂の活動をよろしく願いいたします。